

到相武國之時、其國造詐白於此野中有大沼、住是沼中之神甚道速振神也、於是看行其神、入坐其野、爾其國造火著其野、故知見欺而解開其姨、倭比賣命之所給囊口而見者、火打有其裏、於是先以其御刀、薊撥草、以其火打而打出火、著向火而燒、退還出、皆切滅其國造等、即著火燒、故其地者於今謂燒遣。  
本○遣一也、

〔古事記傳二十七〕燒遣、遣字、眞福寺本、又一本には遣と作り、今は舊印本、又一本などに依れり、百五  
年ばかり前にも出来たる、或此字ども甚心得がたし、書紀萬葉神名式などに依に、津字を誤れる  
書に引るにも遣と作り、此字ども甚心得がたし、書紀萬葉神名式などに依に、津字を誤れる  
か、遣字、下の横畫を去れば、津とよく似たり、延佳本には津と作れど、又は道を誤れるか、道ならば  
り、若然らば、夜伎豆とは、や、後に訛れるか、はた本よ、かにかくに遣遣などにては、如何とも訓  
り、遅とも豆とも通はし云るか、何れにてもあるべし、かにかくに遣遣などにては、如何とも訓  
がたけれど、字は姑舊の隨にて訓は津に從ひぬ、考て定めてよ、萬葉三に、燒津邊吾去しかば、駿  
河なる阿倍の市道に逢し兒等、はも、神名式に、駿河國益頭郡燒津神社、今も燒津村と云あり、又  
いふ、和名抄に、同國益頭郡益頭郷と見え、かの風土記にも、麻賤郡など書れど、益頭は  
豆、此事谷川氏(士清)も云り、頭字音を取れば、益もヤカ、の音を  
音を取れる字にて、即燒津なり、轉して、ヤキに用ひたるなり、然るを麻志豆としも云は、や、後  
に燒と云ことを忌惡みて、其字の訓に唱へ  
更たる物なるべし、然る例他にもあるなり、

〔萬葉集三〕春日藏首老歌一首

燒津邊、吾去鹿齒、駿河奈流、阿倍乃市道爾、相之兒等羽裳、

〔夫木和歌抄二十六〕おきつ 駿河

〔倭名類聚抄六〕駿河國廬原郡息津於木

〔吾妻鏡一〕治承四年十月一日庚辰、甲斐國源氏等相具精兵、競來之由、風聞于駿河國、仍當國目代橘  
遠茂、催遠江駿河兩國之軍士、儲于與津之邊、

〔平安紀行〕沖津の宿に至りぬ、庵原民部入道禪道、駕をまげて、からうたふたつくりこされしに、